Kwansei Gakuin University

祈禱におけるオリゲネスの御父理解

――『祈りについて』を中心に――

梶　原　直　美

「祈り」は、様々な信仰を有する人々のもとに見られる。キリスト教信仰者にとって祈りが重要であることは、多くの人が認めるところである。この「祈り」は、単なる自己洞察や独白ではなく、キリスト教においては「神」という対象に向けられる。

キリスト教の祈り、たとえば「主の祈り」において、キリストの父である神が、われわれの父でもあると言われる。祈りのさいに公言される「父と子」という関係について、有賀鐵太郎は次のように述べている。「…現実の宗教としてのキリスト教は、極めて無邪気に神と人とを父子的関係において見るのであり、両者の間の語らいを当然のこととして前提するのである。すなわち、祈願の意味をも含む祈禱を抜きにしては、生ける宗教としてのキリスト教は成立しない。」(1) つまり、有賀は、神と人間が「父子的関係」にあるということを、父なる神に無邪気に祈願として求める子なる人間、というところに見ている。しかし、父なる神に祈るということは、いかなることなのか。神が父であるとは、どういうことなのであろうか。

1.

キリスト教の祈りは、「福音書、なかでも主の祈りから始まった」(2) ことが指摘されるが、その形成の歴史から、ユダヤ教の祈りを母体とし、ギリシャやローマの様々な影響下で発展してきたと言える。また、主の祈りを含めて、祈りが単に形式的なもの、習慣的な儀礼にとどまらず、キリスト教信仰者の生活にとって不可欠なものとして理解されていたことは、たとえば殉教といった極限状

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

況のなかで熱心にささげられたことからも明らかである。

古代教父オリゲネス（185—253／4）は、古代教会において数多くの著作を残した偉大な神学者として、また極めて熱心な信仰者として知られている。オリゲネスに熱心な教育を施した彼の父親レオニデスは殉教したと伝えられ、オリゲネスもまたその身に迫害を経験した。[3] 彼は『祈りについて』**(περὶ εὐχῆς)** という実践的著作を残しているが、これには、キリスト教史における最初の本格的な祈禱論との評価もなされる。[4]

この書においてオリゲネスは、ある種の祈り、「プロセウケー」**(προοσευχή)** を最も重視している。それは、以下の点を併せ考えると明らかである。

ひとつには、オリゲネスが「ふさわしく祈ること」について論じようとしていたという点である。その根拠として、祈禱を奨励するために語った「…それにふさわしい態度で、それにふさわしく祈り、それにふさわしく信じていないなら、また祈りに先立って、それにふさわしいような生活方法で生きていないなら、手に入れたいもののあれやこれやを（得ることは不可能です）」[6] というオリゲネスの言葉が挙げられる。もうひとつには、『祈りについて』のなかで、まずエウケーについて説明したあとプロセウケーに関して述べ、そしてそれは次に主の祈りへと移行し、最後に祈りを実践するさいの一般的な注意事項を述べている点である。そのような構造によって、『祈りについて』全体が構成されている。これらの二点から、「ふさわしい祈り」としてプロセウケーが論じられていると考えられるのである。

オリゲネスはまた、プロセウケーの向けられるべき相手を、とくに父なる神にのみ限定している。このことについて、彼は、他にも数箇所で繰り返し述べている。[7] これはまた、のちに、オリゲネスが御子キリストを神よりも劣ったものとみなす御子の従属説を説いているとして論争が起きた、そのひとつの根拠にもなったものである。

ただしその一方で、他の著作においてはオリゲネス自身が御子キリストに向けてプロセウケーをささげる記述も見出し得る。厳密であったオリゲネスの、この論述の不一致は、いかに理解されるべきなのであろうか。オリゲネスは、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いかなる根拠で、一体いかなる相手にこのプロセウケーをささげるべきであると考えていたのであろうか。

以下において、なぜ父にのみプロセウケーをささげるのかその根拠を探り、次に、オリゲネスが祈禱において神を父と呼ぶことにいかなる意味を見出していたのかを考察し、最後に、祈禱において父なる神がいかなる者として理解されていたのかを明示することを試みる。

2.

『祈りについて』のなかで、御父にのみプロセウケーを捧げるべきとするオリゲネスの主張が際立っていることを先に述べたが、これに関して、まずその代表的な叙述を提示する。

「さて、禱りとは一体如何なるものであるか理解したのであれば、キリストその方と言えども、生まれた者らの如何なる者に対しても禱ってはならず、ただひとり、万物の神、御父に[禱らねばなりません]。…ところで、御父にではなく、御子に禱るということは、すべての人が例外なしに、全く不当なことであり、明らかな証言に反することを主張するものであると認めているのです。…ですから、残されるのは、万物の父なる神ただおひとりに禱ることです。しかし、「大祭司」を抜きにしてではありません。」(8)

オリゲネスは、御父にのみ禱るということを教えるだけでなく、以上のように、御父と御子の両者、および御子にのみ向けて禱ることが不当なことであるとも述べており、御父ひとりに向けて禱るということが明らかに強調されている。

また、オリゲネスがこのことを取り上げるにさいして、同じく御父にのみささげられるべきものとして「栄唱」**(δοξολογία)** が挙げられていることも述べておく必要があると思われる。その具体的な叙述は以下のとおりである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「はじめに、そして祈りの冒頭で、力の限り、共に賛美されるキリストを通して 共に賞賛される聖霊のうちにあって、神への栄唱を唱えるべきです。」(9)

「最後に、キリストを通して、聖霊のうちにある神への栄唱で祈りを終えるべきです。」(10)

これらの論述の根拠は一体どこにあるのか。まず、プロセウケーに関して考察する。

プロセウケーについては、まず、古代教会の典礼上の習慣として、大祭司なるキリストを通して御父にささげられていたことが指摘される。(11) オリゲネスは、「わたしたちは皆、同じことを語り、祈りの方法について別れ争うことのないようにしましょう。」(12) とも述べており、ここからは祈る方法によって教会内に不一致が生じることを懸念する態度も伺える。(13) ただしこれは、論述の根拠ではなくひとつの動機にすぎないと言えるであろう。

オリゲネス自身によるものとしては、『ケルソス駁論』**(πρὸς τὸν ἐπιγεγραμμένον κέλσου ἀληθῆ λόγον)** 第五巻6における、「そこで彼らは、天と他のあらゆるものをお造りになった、万物の上に在す神以外の何ものをも崇めないのだ」(14) という叙述に注目したい。彼は、出エジプト記20章3節から5節、および申命記4章19節を根拠に、ユダヤ教が万物の創造者である唯一の神以外を礼拝しないとする内容を記している。ここに、「神にのみ」プロセウケーをささげるひとつの根拠を見出すことができる。

また、少くとも、御父にのみプロセウケーをささげるとする論述の根拠のひとつになっているのは、オリゲネス自身による次の記述、つまり、「実に、『わたしたちに禱ることを教えてください』(15) と尋ねられた［主］は、ご自身に禱るように教えられず、『天におられるわたしたちの父よ』(16) 云々と言われ、御父に［禱るように教えておられます］」(17) という言葉から、福音書に記された「主の祈り」であることが考えられる。

さらに、その事柄に関する結論部には、「以上のことを語られるイエスに聞き従い、［イエス］を通して神に祈りましょう。」(18) と語られていることから、祈

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

りが、主の祈りをも教えられたイエスの言葉によって統制されるべきと考えられていることが伺える。

そして最後にもう一点、重要なことは、主の祈りがプロセウケーとして理解されているということである。これについては、新約時代、祈禱を表現する一般的な用語がプロセウケーであった(19) ことから、オリゲネスが聖書の用語を用いたものと思われる。

次に、栄唱に関する内容に注目する。栄唱は、『祈りについて』において、祈りの具体的な形式等を記すさいに、「感謝」(**εὐχαριστία**)、「告白」(**εξομολογια**)、「懇願」(**αἴτησις**)とともに四つの主題のひとつとして聖書から取り挙げられ、説明されている。(20) これについては、オリゲネス自身の神学的な解釈を伴う記述はあまり見られない。それは思想的、概念的であるよりもむしろ実際的であり、つまり、祭儀という実践的な側面からの影響がより多く考えられるのである。(21) オリゲネスには、聖書と教会の伝承を重視する態度が指摘される(22) ため、このことは十分に理解し得る。

以上のことから、プロセウケーや栄唱を御父にのみささげるという論述は、まず当時の教会の、主に典礼からの影響、および、聖書の叙述に従おうとする彼の態度に基づくものであることが考えられる。そしてここには同時に、御父のみの価値を重んじる意図は伺えず、むしろ、御子キリストをも重視する傾向が見受けられる。

3.

以上、プロセウケーや栄唱を御父にのみささげられるべきとするオリゲネスの主張について述べてきたが、ここで、この内容と一致しないオリゲネス自身の祈り方が見られることに関しても考察しておかなければならない。つまり、キリストにプロセウケー、あるいは栄唱をささげている箇所が、彼自身の他の著作のなかに認められるということである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

『ケルソス駁論』第五巻4においては、次のように述べられている。

「わたしたちはすべての『願いと、禱りと、執り成し[23]と、感謝』[24]を、すべての天使の大祭司、生ける神的ロゴスを通じて、万物の上に在す神に送らねばならないのだ。わたしたちはまた、もし禱りの絶対的意味と相対的意味についての明瞭な理解力をもつことができれば、ロゴスそれ自身に願い、彼に執り成し、感謝し、彼に禱りすらする。」[25]。

また、オリゲネスの聖書講話の結びには、直接キリストに栄光を帰す栄唱が見られることが指摘される。[26] たとえば、『雅歌講話』の最後は次のように結ばれている。

「…わたしたちは共に立って、神に祈りましょう。わたしたちが花婿、ロゴス、知恵、キリスト・イエススにふさわしい者となれますように。栄光と力とが代々に彼にありますように。アーメン」[27]

これらはいかに理解されるべきなのか。

有賀は、プロセウケーをささげる相手に関して不一致な内容を、次のように説明している。「時にかれの祈願はキリストに向けられている。プロセウケーとしての祈りは父なる神にのみ捧げらるべきものであるが、デエーシス即ち祈願はキリストにも捧げられてよいとかれは考えていた事は先に論じた如くである。」[28] しかし、『ケルソス駁論』第五巻4では、エウケーではなく、プロセウケーをキリストにささげると述べられているため、この問題に関しては、有賀のこの説明では十分とは言えない。他方、『ケルソス駁論』の邦訳者でもある出村みや子は、その訳注のなかで、「わたしたちの至高の神への祈りは、大祭司を通じてなされねばならない。それゆえキリストへの祈りは正当とみなされるが、その意味は相対的であって絶対的ではない。」[29] と述べている。ここから考えても、御父と御子をそれぞれ絶対的、相対的とするオリゲネスの理解には、や

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

はり彼の従属主義的な側面を指摘しなければならないと思われる。(30) しかし、プロセウケーの絶対的相手として御父のみが考えられているということからは、御父にのみプロセウケーをささげるべきとするオリゲネスの主張の一貫性を主張することができる。

他方、栄唱は、当時、日常的な祈りのなかではキリストに対しても用いられていたことが指摘される。(31) ゆえに、聖書講話(32) においては、その著作の性質上、あまり形式的ではなく、心の高揚に伴って身近なキリストに栄唱がささげられたことは十分に考え得る。これと同様に、プロセウケーもまた、形式にとらわれない場合には、キリストにも向けられることがあった。ワイルズは、それゆえ、オリゲネスがそのような混乱する祈りの様式を神学的根拠に基づいて統一することを試みたのだと述べている。(33)

これらのことから、プロセウケーに関して言えば、オリゲネスは、キリスト信仰者たちのささげるプロセウケーを「御父にささげる」というひとつの形式に統一しようとする意図を持ち、そのように試みていたものと考えられる。そして、その基準は当時の教会の典礼であり、根拠は聖書に置かれていたということができる。

4.

以上、御父にのみプロセウケーをささげると主張するオリゲネスの立場について述べた。次に、ゲッセルも指摘しているように(34)、オリゲネスが『祈りについて』において神を言い表すさい、「御父」という言葉を頻繁に用いていることに注目することにする。

確かに、オリゲネスは『祈りについて』のなかで神を「父」と呼ぶだけでなく、他の著作においても「全宇宙の父」(35)、「イエス・キリストの父」(36) と呼んでおり、神は「父」として認識されている。しかし、神を「父」として言い表す目立った傾向は、彼の全著作に共通のものではない。つまり、祈りという事柄を考えるなかで、神をあえて「父」と呼ぶ態度が伺えるのである。では、この「父」と呼ぶことにはどのような意味が込められているのであろうか。ま

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ず、オリゲネスが重視している[37]「主の祈り」の、冒頭の言葉から考察していくことにする。

ルッツによると、「主の祈り」は、オリゲネスに限らず古代教会以降、祈りの基準として尊重されていた。[38] ゆえに、この冒頭で「父よ」と呼び掛けることには、オリゲネスばかりでなく、当時の教会の習慣という背景が考えられる。

「父」という呼び名そのものは、すでに旧約聖書以前[39] のシリア-カナン世界においてみられたが、キリスト教的な意味は聖書に根拠付けられ、新約聖書では、神はとくにイエスの父として告示された。[40] オリゲネスの時代、「父よ」という呼び掛けはすでに定着していたため、彼がそれを受け入れていたということが考えられる。しかし、「父」という呼び掛けはプラトン主義にも見出されるため[41]、それだけではとくに聖書的とは言い切れない。それでもただ、オリゲネスが主の祈りを重視しているということから、やはり聖書的であると考えることができる。

では、相手として呼び掛けられている「父」は、オリゲネス自身にとって、いかなる存在として理解されていたのか。

「父」をめぐって、オリゲネスは次のように述べている。

「わたしたちがこのように禱るなら、わたしたちは義しい神に出会うだけでなく、子らを見捨てず、わたしたちの密やかな所に居られ、わたしたちが戸をしめさえすれば、奥の部屋のうちにあるものを監視し、豊かなものとされる御父に出会うことになるでしょう。」[42]

「聖なる者らの神は『父』であるので、その子らが必要としているものが何んであるかを知っておられます。」[43]

「救い主によって開示された、神を父と呼ぶほどの何の憚りのない確信を禱りのなかに見出してないということです。」[44]

これらは、オリゲネスの「父」理解に関する示唆を与えてくれる。つまり、「父」とは、見捨てないで豊かさを与え、必要や欠乏を知り、その信頼関係に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

確信を持ち得るような存在なのである。

そして、この「父」というのは、彼にとって自分の父親を連想させる存在であったこともしばしば指摘される。(45) 彼の父親は、彼に十分な教育を施し、最期には迫害によって死を遂げた熱心なキリスト者だったと伝えられている。そしてこの出来事は、17歳のオリゲネスを感動させた。(46)

これらの背景のなかで、オリゲネスは主の祈りの冒頭の呼び掛けによって、神と被造物との徹底的な距離(47) を保持しながら、神と人との関係の可能性を開く神の恩寵をも表現していることが考えられる。(48) そしてさらに、それが御子の存在のもとに成立するものとして理解されていたということを付け加えるべきであろう。

5.

以上、二つの事柄を中心に考察してきた。そのなかで幾つかの点が明らかになった。

ひとつには、オリゲネスが、プロセウケーをささげるということを、ふさわしい祈り、つまり御子を通して、父に集中するということとして理解していたという点である。そしてそれは、御子イエスが教えた祈りに基づくものである。

ふたつめには、プロセウケーの相手である神は、善に留まらず愛をも注ぐ「父」としての神であり、その父との関係をもたらすのは唯一、御子キリストだということである。父なる神は義なる方に留まらず、子らを見捨てず、人間のうちにあるものを見つめて豊かなものとされる方なのである。プロセウケーにおいてこの父なる神に向かい、父なる神と出会うためには、御子が不可欠とされている。父なる神へのプロセウケーは、御子キリストなしにはささげられないからである。

ゆえに、オリゲネスが父なる神との絶対的な隔絶を認識しながら、ほかでもなくただ御子キリストのゆえに、神を最も身近な父と呼び、父との関係の回復を確信していたことが、ここで強調されなければならない。

オリゲネス自身は、ときに栄唱を帰すほどにキリストを尊重していた。しか

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

し、祈りのなかの祈り、「プロセウケー」をささげる相手は、唯一不変の父なる神のみであった。限りある人間が、御子ゆえにこの絶対者である神を自分の「父」として主体的に「呼ぶ」[49] ことによって父子の愛の関係を受け入れることこそ、オリゲネスの語る「ふさわしい祈り」だったのではないであろうか。また、彼は、「地上のこと」「小さなこと」を求めずに、「天上のこと」「大きなこと」を求めるように勧め[50]、ただ勧めるのみならず、自らの生き方によってそれを具体化した。オリゲネスのこの歩みさえも、単に彼のなかから生じてくる倫理的な厳格さによるのではなく、まさに御子キリストによってのみ与えられる、父なる神からの愛の関係によって教え、導かれたものと言えるであろう。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

【注】

オリゲネスの著作、およびその校訂本の表記には、以下の略記を用いる。

PE：『祈りについて』　PA：『諸原理について』

CC：『ケルソス駁論』　HomCnt：『雅歌講話』

GCS：Die griechischen christlischen Schriftsteller der erst Jahrhunderte, Berlin 1887ff.

SC：Sources chrétiennes, Paris 1942ff.

(1) 有賀鐵太郎『オリゲネス研究　有賀鐵太郎著作集1』(長崎書店　1943年)、創文社　1981年、41頁。

(2) Hamman, A. , 'Prayer', in:"Encyclopedia of the Early Church", p. 796r.

(3) エウセビオス『教会史』、VI, 1-3;39。レオニデスに関しては殆ど知られていない。(エウセビオス『教会史2』秦剛平訳、第6巻、山本書店　1987年、訳注2、参照。)

(4) たとえば、次のような評価がなされている。「…この書は、キリスト教会において祈禱の問題を神学的に取り扱った最初の単行本として、キリスト教敬虔史における重要な地位を占めるものである。…これより前既にテルツリアヌスはDe Oratione（祈禱論）を著しているのであるが、ただそれは思想的反省というよりも極めて実践的性格を扱った書である。また、オリゲネスの師クレメンスは、その『ストローマテイス』においてかれのいわゆるグノースチコス即ち覚知者の姿を描くに当たって、その覚知者の祈りについて論じている。思想体系からいうならば、オリゲネスの『祈禱論』は、このクレメンスの祈禱に関する反省を受け継いで、これを更に聖書的、神学的に展開したものという事を得よう。」(有賀鐵太郎、前掲書、82頁。)

(5) オリゲネスは祈禱を言い表すさいに、エウケー**(εὐχή)**とプロセウケー**(προσευχή)**というふたつの用語を用いている。エウケーは広義の祈禱して、またプロセウケーはⅠテモテ2，1に根拠を持つ四種類の祈禱のうちのひとつ「いとも大いなることを謹厳に求める者によって、栄唱とともに

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ささげられる祈り」(**"μετὰ δοξολογίας περὶ μειζόνων μεγαλοφυέστερον ἀναπεμπομένην ὑπό του"**, GCS 3,331, 6-7) として理解されている。(PE 14, 2 [GCS 3,331, 4-11] .) ここでは、小高毅の訳にしたがって、エウケーを「祈り」、プロセウケーを「禱り」と表記する。(『祈りについて』小高毅訳、創文社 1985年、231頁、解説の註2、参照。)

(6) **"μὴ οὕτως εὐξάμενος μετὰ διαθέσεως τοιᾶσδε, πιστεύων οὕτως, οὐ πρὸ της εὐχῆς τόνδε βιώσας τὸν τρόπον."** (PE 8, 1[GCS 3,316, 24-26].)

(7) PE 15, 1 (GCS 3,333,26-334, 1); 15, 2 (GCS 3,334, 18-22); 16, 1 (GCS 3, 336, 5-13). Cf. 15, 3 (GCS 3,335, 3-9).

(8) **"Εὰν δὲ ἀκούωμεν ὅ τι ποτέ ἐστι προσευχή, μή ποτε οὐδενὶ τῶν γεννητῶν προσευκτέον ἐστὶν οὐδε αὐτῷ τῷ Χριστῷ ἀλλὰ μόνῳ τῷ θεῷ τῶν ὅλων καὶ πατρὶ, ··· τὸ μὲν οὖν τῷ υἱῷ καὶ οὐ τῷ πατρὶ πᾶς ὁστισοῦν ὁμολογήσει εἶναι ἀτοπώτατον καὶ παρὰ τὴν ἐνάπγειαν λεχθησόμενον ἄν··· λείπεται τοίνυν προσεύχεσθαι μόνῳ τῷ θεῷ τῷ τῶν ὅλων πατρὶ, ἀλλὰ μὴ χωρὶς τοῦ ἀρχιερέως, ···"** (PE 15, 1 [GCS 3, 333,26-334, 14]).ここでは「父に (向けて)」ということのみならず、「キリストを通して」(**διὰ Χριστοῦ Ἰησοῦ**)、ということも強調されていることに注意したい。(Cf. PE 15, 2 [GCS 3,334, 17-335, 2].)

(9) **"κατὰ δύναμιν δοξολογίας ἐν τῇ ἀρχῇ καὶ τῷ προοιμίῳ τῆς εὐχῆς λεκτέον τοῦ θεοῦ διὰ Χριστοῦ συνδοξολογουμένου ἐν τῷ ἁγίῳ πνεύματι συνυμνουμένῳ·"** (PE 33,1 (GCS 3,401, 14-16).

(10) **"καὶ ἐπὶ πᾶδι τὴν εὐχὴν εἰς δοξολογίαν θεοῦ διὰ Χριστοῦ ἐν ἁγίῳ πνεύματι καταπαυστέον."** (PE 33,1 [GCS 3,401, 25-26].)

(11) 『祈りについて』小高毅訳、236頁、解説の註47より。『ディダケー』9; ユスティノス『弁明』1, 65。M. ワイルズ著、三小田敏雄訳『キリスト教教理の形成』、日本基督教団出版局 1983年、70頁、参照。ここでは、キリストへの直接的呼び掛けも、短い絶叫的な祈りと賛美の歌において見られることが指摘されている。同上、71頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(12) ***"τὸ αὐτὸ λέγοντες μηδὲ περὶ τοῦ τρόπου τῆς εὐχῆς σχιζόμενοι."*** (PE 16, 1 [GCS 3,336, 6-7].)

(13) 祈禱を不要だと主張する人々の存在が祈る人々の信仰生活を脅かしていたことは事実である。

(14) ***"αὐδὲν ἄλλο σέδουσιν ἢ τὸν ἐπὶ πᾶσι Θεόν, ὃς ἐποίηδε τὸν οὐρανὸν καὶ τὰ λοιπὰ πάντα."*** (CC V, 6 [SC 147, 26, 23-25].)

(15) Lk 11, 2.

(16) Mt 6, 9.

(17) ***"'δίδαξον ἡμᾶς προσεύχεσθαι' οὐ διδάσκει αὐτῷ 'προσεύχεσθαι' ἀλλὰ τῷ πατρὶ, λέγοντας· 'πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς' καὶ τὰ ἑξῆς."*** (PE 15, 1 [GCS 3,334, 2-4].)

(18) ***"Ταῦτ' οὖν λέγοντος ἀκούοντες 'Ιησοῦ τῷ θεῷ δὶ αὐτοῦ εὐχώμεθα,…"*** (PE 16, 1 [GCS 3,336, 5-6].)

(19) Cf. Kittel, G., Theologisches Worterbuch zum Neuen Testament, Stuttgart, pp. 774-808.

(20) Cf. PE 33,1-6 (GCS 3,401, 10-402, 35).

(21) 『祈りについて』小高毅訳、246頁、解説の註128、および同、58頁、参照。Cf. Studer, B., 'God', in:"Encyclopedia of the Early Church", p.355l, esp. ls 64ff.

(22) オリゲネス自身も、たとえば「述べたことは、神聖な書によって確証されねばなりません」 ***("Κατασκευαστέον δὲ ἀπὸ τῶν θείων γραφῶν τὰ εἰρημένα τοῦτον τὸν τρόπον.",*** PE 9, 1 [GCS 3,317, 28-29].) と述べている。

(23) 出村訳では、この「執り成し」 ***(ἐντευξις)*** は「祈願」と訳されている。『ケルソス駁論II』出村みや子訳、教文館 1997年、187頁。

(24) この四種類の祈禱は、Ⅰテモテ2, 1における記述と一致する。

(25) ***"Πᾶσαν μὲν γὰρ δέησιν καὶ προσευχὴν καὶ ἔντευξιν καὶ εὐχαριστίαν ἀνατεμπτέον τῷ ἐπὶ πᾶσι θεῷ διὰ τοῦ ἐπὶ πάντων***

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ἀγγέλων ἀρχιερέως, ἐμψύχου λόγου καὶ Θεοῦ. Δεησόμεθα δὲ καὶ αὐτοῦ τοῦ λόγου καὶ ἐντευξόμεθα αὐτῷ καὶ ἐυχαριστήσομεν καὶ προσευξόμεθα δέ, ἐὰν δυνώμεθα κατακούειν τῆς περὶ προσευχῆς κυριολεξίας καὶ καταχρήσεως.” (CC V, 4 [SC 147, 20, 19−22, 25]).

(26) 『祈りについて』小高毅訳、236頁、解説の註47、参照。

(27) “Quapropter consurgentes deprecemur Deum, ut digni efficiamur sponso, sermone, sapientia, Christo Iesu, eui est gloria et imperium in saecula saeculorum. Amen!” (Hom Cnt 13 [SC 37, 148, 23-26].)小高毅は「オリゲネスは『講話』の終りを栄唱で結ぶ。その典型的なものがこのⅠペトロ四11を用いた形である」と指摘している。『雅歌注解・講話』小高毅訳、321頁、解説の注20。

ほかに、『雅歌注解』第一の講話の最後でも「[花婿であるキリストに]栄光が代々にありますように。アーメン」(“Si enim ille surrexerit, ipse tibi aurum, ipse faciet argentum, ipse tuam mentem sensumque decorabit, et eris uere diues in sponsi domo sponsa perfecta, cui gloria in saecula saeculoru. Amen!” (HomCnt 10 [SC 37, 102, 2-6])と結ばれている。

(28) 有賀鐵太郎、前掲書、103頁。

(29) 『ケルソス駁論』出村みや子訳、272頁、訳注8。

(30) オリゲネスの従属主義に関してはこれまでに多くの論議がなされた。たしかに、彼の神学のなかには、御父のみを秀でたものとする傾向が明白である。しかし、御子の誕生の永遠性を説き御子の神性を強調するなど、当時の考え方にとって画期的な主張をした点で、従属主義というよりはむしろ、正統主義への方向性を与えたと言うことができ、オリゲネスのその独創性と方向づけの力は評価に値する。

(31) M. ワイルズ著、三小田敏雄訳、前掲書、71-73頁、参照。

(32) 『祈りについて』の執筆年代は231年から235年の間と推定されるのに対し、現存する聖書講話の大部分は、『ルカ福音註解』を除けば、245年以降のも

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

のであると推測される。(小高毅『オリゲネス』、清水書院、94頁、参照。)つまり、オリゲネスが『祈りについて』を執筆したのちに聖書講話は書かれたものと考えられる。

(33) M. ワイルズ著、三小田敏雄訳、前掲書、70-81頁、参照。

(34) 「オリゲネスがしきりに神の父の名を目標としているように、『祈りについて』の書に最もよくみられる神の特徴は、「父」という名として示される。」(Gessel, W. , Die Theologie des Gebetes nach > De Oratione < von Origenes, München/Paderborn/Wien 1975, p. 106, esp. n9.)

(35) "parens universitatis" Cf. PA I, 1, 6(Görgemanns-Karpp, 21, 9).

(36) "pater domini nostri Iesu Christi" Cf. PA I, Prae, 4(Görgemanns-Karpp, 10, 2-3).

(37) オリゲネスが「父よ」という呼び掛けで始まる「主の祈り」を重視しているということは、『祈りについて』の三分の一以上においてそれが論じられていることからも明らかである。

(38) また、時代を遡ると、主の祈りの呼び掛けはまず、その当時に重要となりつつあったユダヤ教の祈りの「天にいます父よ」という呼び掛けを模範に拡大されたものである。(U. ルッツ著、小河陽訳『EKK 新約聖書註解マタイによる福音書 I /1』、教文館 1990年、480-483頁、参照。)なかでも「父よ」という呼び掛けは、家族的な原語から由来するもので、年少の、また成人した子供が彼らの父親に向かって用いる語りかけとして、また年老いた男達に向かっての尊敬を込めた語りかけとして用いられていたことが指摘される。ルッツは、しばしばエレミアスのテーゼに従って読まれるように、小さな子供の「パパ」に合致するというのは、このような偏った形においては間違っていると述べている。さらに、パレスティナ中期アラム語という文脈において神への呼び掛けに"abba"が選ばれたということは特異的であり、後のタルグム・アラム語の枠内では僅かに"abba"が神に用いられる典拠は存在するものの、語りかけの形としては決して用いられていないこと、さらに、中期ヘブライ語においては、"abba"は語りかけの形と

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

して可能なものであるが、神には決して用いられなかったことを述べている。(同上、804-805頁、註51および註54、参照。)

(39) 旧約聖書では、アブラハムが「民衆の父」(Gen 17, 5) であり、「地上の氏族すべて」(Gen 12, 3) を祝福に入れることができた。そして、父と子という血族関係は、預言者時代にいたって養子縁組の関係に変化した。(Cf. H. -J. Kraus, 'Vaternamе Gottes II. Im AT', in: RGG, cols. 1233-1234.) ただ、オリゲネス自身は、「神が父と呼ばれ、[神] に対する信仰のロゴスによって生まれた者らが子らと [呼ばれる] のであるにしても、確固不動の子たる事実が、旧約時代の人々のもとに見い出されることはありません。…しかし、わたしたちの主イエス・キリストの到来によって『時は満ちる』ことになります。その時、望む者らは『子としての身分をいただきます』。」と述べている。(PE 22, 2 [GCS 3,346, 29-347, 7].)

(40) Cf. V. Grossi, 'FATHER(name of God)', in: Encyclopedia of the Early Church, p. 320. なお、人間に関しては、神は「幼子の」(Mt 11, 25) 父、イスラエル人 (Mt 21, 31ff.) 或は異教徒たち (Mt 25, 32ff.) の父、また、神に祈ったり (Mt6, 9 ; Mk14, 36 ; Lk11, 2) キリストに倣う者らの父であった。

(41) テュロスのマクシモスによれば、神は「万物の父」と言い表される。(Philosophumena [ed. H. Hobein, Leipzig 1910] IX, 5.) また、中期プラトン主義者たちは、神の超越性のほかに善性をも神の根本概念としたことが指摘される。P. ネメシェギ「オリゲネスにおけるプラトン主義」(上智大学中世思想研究所編『キリスト教的プラトン主義』)、創文社 1985年、7-10頁、参照。

(42) ***"δῆλον δὲ ὅτι τῷ δικαίω, ἐὰν δὴ οὕτως εὐχώμεθα, οὐ μόνον θεῷ ἀλλὰ καὶ πατρὶ ἐντευξόμεθα, ὡς υἱῶν μὴ ἀπολειπομένῳ ἀλλὰ παρόντι ἡμῶν 'τῷ κρυπτῷ' καὶ ἐψορῶντι αὐτὸ καὶ πλείομα τὰ ἐν τῷ ταμείῳ ποιοῦντι, εὰν αὐτοῦ 'τὴν θύραν' ἀποκλείσωμεν."*** (PE 20, 2 [GCS 3, 344, 28-345, 2].)

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(43) ***"'οἶσε γὰρ' ὁ τῶν ἁγίων θεὸς, 'πατὴρ' ὢν, 'ᾧν χρείαν' ἔχουσιν οἱ υἱοὶ αὐτοῦ,*** … "(PE 21, 2[GCS 3,346, 3-4].)

(44) ***"ἀλλ' ὅτι ἐν προσευχῇ τὴν ἀπὸ τοῦ σωτῆρος κατηγγελμένην παῤῥησίαν περὶ τοῦ ὀνομάσαι τὸν θεὸν πατέπα οὐχ εὕρομεν πω."*** (PE 22, 1 [GCS 3,346, 17-19].)

(45) ネメシェギは、オリゲネスが殉教者たるすぐれた父を持っていたため、「父」の価値に対して敏感であったと考えている。そして、「ひとり子であるロゴスが永遠に神ともにいるということを否定するのは、危険きわまりないことである。神はまさにこのロゴス、この知恵を喜びにしたのである。したがって、ロゴスの永遠の存在を否定することは、神に永遠に喜びがあったことの否定と等しい」(PA 4, 4, 1:V, 350, 14-18)というオリゲネスの言葉を引用し、「子どもがともにいることを限りなく喜ぶ父親として神を考えることは、確かに人を感動させる。オリゲネスがどれほど深く父親の気持ちを察したかは、この言葉からうかがえる。」と述べている。(P. ネメシェギ「オリゲネスの神学における御父と御子の関係」『カトリック研究』36、1979年、80頁。)

(46) エウセビオス『教会史』、VI、2。オリゲネスはまた、「私は正しく生きることによって、殉教者である父にふさわしい者とならなければならない。父は、その殉教によって、キリストにおいて偉大な者となった」(HomEz 4, 8)と述べている

(47) オリゲネスは神について、「全ての地的存在、即ち非物体的存在のなかで、最もすぐれ、最も名状し難く、最も計り難く卓越している者こそ神である。…人間の精神の眼ざしでは神の本性を捕らえることもできず、一瞥すらできない」(PA I, 1, 5) と述べ、神と人間との間に全くの断絶を説いている。

(48) ゲッセルもこのような考えを提示している。W. Gessel, op. cit. , p. 111.

(49) 注40、および注45、参照。

(50) PE 16, 2(GCS 3,336, 21-337, 17).

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

※本稿は、第48回キリスト教史学会(1997年9月13-15日 於 長崎純心大学)において研究発表した草稿を訂正、加筆したものである。

NII-Electronic Library Service